

今年の最終号になります。世相を反映した(暗い)記事じゃなくて、「明るく締めなよ」と子どもに言われたもので・・・

無慈悲な世を無施肥で明るく

ウラ面からの抜粋です。

“グリーンツーリズムをハコモノづくりのためのお題目にするのではなく、農村を、やすらぎと人間性回復の場とする真に中味のあるグリーンツーリズムの発信基地をめざすことで、街づくりと農業の再生・発展が期待できる、その可能性が広がると確信します。

もちろん、レンゲソウにこだわるわけではありません。それでも、みずからの具体例をもとに提案をしたいと思います。

むかし理科の授業で習ったはずですが、豆科の作物であるレンゲソウは、土中の微生物と共生して、空気中の8割を占めるチッソを肥料として固定する能力をもっています。田んぼにレンゲソウの種をまいて育て、それを肥料として生

かすことは、かつてはどこでもおこなわれていました。

わが家では今年、3haの水田に化学肥料を全く使うことなく稲を栽培し、全量を直接消費者に届ける計画です。その前に、五月の連休のころ、磯原から中郷にかけての1万坪ちかくでレンゲの花の景色を演出できたことが大きな自慢です。

無農薬の試みについては機会を改めて報告また提案をさせていただくつもりですが、たった一軒の農家でも、このていどのことまではできるわけです。行政が本気になれば、相当のことができるはず” (以下略、ウラ面に全文)

と、母ちゃんが市議会で大見得をきったのが8年前のことです。そしてその後、大きな前進があったの



里のギャラリー 31

で、ここで改めて報告するしたい。

たとえば下の写真の田んぼ。じつは去年も一昨年もレンゲの種まきをしていません。春に花を咲かせて実を散らし、それが秋になって芽を出してくれるようになったのです。

ちまたでは肥料の値上がりが伝えられています。ところが、すずき産地では、他からいっさい肥料を持ち込むことなく稲が育つ田んぼが増えているのです。

というわけで“無慈悲な世を無施肥で明るく”...苦手なダジャレで08年を締めくくらせていただきます。



5月、子どもたちが遊ぶレンゲ田



レンゲだけを肥料に育った稲

稲刈り後の田んぼには、レンゲが自生。肥料を使わないのはもちろん、レンゲの種まきもせず、まさに循環型稲作！

8年以上前になりますが、2000年9月の北茨城市議会において、すずき産地の母ちゃんこと鈴木やす子議員がおこなった「レンゲの里」構想の質問と提案を端折って転載します。前ページとの関連記事です。

「レンゲの里」構想の提唱と実践

農業と街づくりに関して質問と提案をいたします。

市が、圃場整備や用水路施設の改修などでも力を尽くしていることは承知しております。しかし、農家の嫁という視点に立って申し上げれば、農政といえば減反の推進ばかり、田んぼに米を作るなど押し付けてくる存在というのが率直な第一印象です。

(再質問)

花やトマトや畜産の生産者が頑張っていることは頼もしく、今後とも期待したいと思います。ただし、それを盾にして市当局として満足したのでは不十分です。

地域をみたとき、目に入る風景は山と海と、そして水田です。市農業の大半を占める稲作への対策をないがしろにしているはずはありません。水田農業が危機に瀕しているまさにこのときに、本気になって取り組むのは減反の推進ばかり、あとは国や県に指示されたことをこなすだけ、あるいは補助金を見つけて施設を作れば役割を果たしたかのような姿勢を改めることを求めます。市の農業発展を期し、街づくりとも結びつけた前向き、積極的な施策の展開を求めたいと思います。

担当課の話をうかがったさい、そんなことは国の問題だという言われ方もなさいました。そのことに関して、一昨日の新聞にのった小さな記事が目にとまりました。オーストラリアの農政当局者が、アメリカやヨーロッパにおいて農業補助金が増やされていること、そしてセーフガードの乱発に留意を促しているという内容です。ここでいっているセーフガードとは、輸入の増加が国内産業に打撃を与えているばあいに緊急に輸入を制限できる、WTO協定にも認められた制度です。アメリカでもヨーロッパでも、そしてお隣の韓国でも、

これからの農業をどう継続・発展させるのかという指針が示されていないことによるものだと考えます。

いわゆる米の減反政策は30年の永きにわたって継続されています。食糧制度を守るためとか、米の輸入を阻止するためとか、都合のいい理由がつけられましたが、ことごとくが破られて、いま唯一の理由が「米価

このセーフガードを発動して国内農業を守っているわけです。ところが、わが日本政府は一度たりとも発動していません。ですから、たとえば地域農業を守るために、このセーフガードの発動を国に求めていくことは自治体の役割であると考えます。

そのように、地方と農家の立場にたった国への働きかけを強めていくと同時に、やはり地方自治体として独自の発想で地域の暮らしと産業を守り発展させていく取り組みに力を入れていくことを求めたい。

お示しするパネル(省略)は、私の故郷である北海道の旭川市にもほど近い北竜町という小さな町が取り組んでいるヒマワリ畑の写真です。何年か前、私の夫が北竜町農協の組合長さんを訪ねたことがあります。そのさいに聞いた話を紹介させていただきます。

この町では早くから有機米の栽培に力を入れ、福岡県のほうの生協と連携して、農産物の流通ばかりでなく人と人との交流にも力を入れてきたそうです。そして写真のひまわり畑ですが、組合長さんの話によれば、たった一人の着想がきっかけだったといえます。

ある1人の職員の方がヨーロッパを旅行したさい、ふと飛行機の窓から一面のひまわり畑が見えたそうです。これで町おこしができないものかと、その後、農協や役場、商工会などを巻き込んで、町ぐるみの取り

の低下を防ぐため」です。

ところが現実には、全国的にも当市においても、示された減反の目標数値を達成してきているにもかかわらず、価格は暴落をつづけています。今年の農協の仮渡し金でみると、コシヒカリの1等米でも1俵が1万2400円。価格安定基金や共補償などの負担増も考えると、米の輸入が始まってからわずか6年間で1万円以上の暴落です。

まさに緊急事態であると私は考えます。現状を、市当局はどうみているのか、また現時点で検討している対策についてお示しいただきたい。

組みにしてきました。そうして今では、わずか人口2700人ほどの町に夏の1ヶ月たらずの期間だけで、20数万人が訪れるまでになっています。ひまわりを活用したアイスクリームやワイン、温泉など次々に新しい特産品・施設も生まれ育っています。

こうした意欲ある取り組みは、国や県の指示を受けてこなしているだけでは絶対に生まれてこないと思います。職員も市民も、一人ひとりが前向きに街づくりを考えられるような、そういった夢のある施策を示すことが地方自治体の一つの大きな役割であるはずで

もう一つお示しするパネルは、私の住んでいる地区の航空写真です。パソコンで画像処理をして、田んぼ全部にレンゲソウの花を咲かせてみました。私たちの町が、実際にこんな風景になったら、何と素敵なことでしょう。...(ここからオモテ面に抜粋)...

ひきつづき私は、水田稲作を守り発展させ、あわせて街づくりの一つの方向としても、「レンゲの里～北いばらき」、あるいは「花の街～北茨城」を自らの実践も重ねながら提案していく所存です。現段階では、そのとおりにやれと要求するものではありませんが、ぜひ市当局にあっても、国県言いなりにとどまらない、市独自の前向き具体的な農業施策、そして街づくり施策の推進を求めて要望・提案といたします。